

《書評》

Michael F. Davis and Petra Dierkes-Thrun, eds.,

Wilde's Other Worlds

New York and London: Routledge, 2018.

野末 紀之

「謝辞」によれば、本書は2014年夏にパリで開かれた国際学会(“Wilde Days in Paris”)がもとになっている。序文のあと14本の論文が5部に配置されている——「継承された世界」「美的世界」「神話的世界」「代替世界」「後の世界」。全体は統一よりもひろがりを目指していると言えそうだ。論文執筆者とタイトルはインターネットでも確認できる。

ざっと眺めると、ワイルドの、また彼に影響を受けた作品のインターテクスチュアリティを検証したものが少なくない。たとえば『ドリアン・グレイの肖像』と類似したテーマと形式をもつ多数のアメリカ小説が取上げられ、ワイルドがそれらを参照しながら行なった数々の工夫が丹念にたどられる(Sean O’Toole)。またこれは意外とは言えないかもしれないが、ダンヌンツィオの『聖セバスチャン』と『サロメ』との詳細な比較を通じ、前者は後者の部分的模写であり、両者は主人公の両性具有や象徴演劇的性質において共通していることが分析される(Elisa Bizzotto)。さらに、ワイルドはワーグナーの音楽にあまり興味はなかったと見なされているが、童話には哀れみや救済(とりわけ前者)のテーマにその影響が如実であることを、手紙からの引用をまじえて語られる(Yvonne Ivory)。いずれも大量の新味のある情報に圧倒され、ありがたくも消化不良気味となることは避けられない。

さて、使用頻度はそれほど多くはないけれども、あえてキーワードをあげるなら「コスモポリタニズム」だろうか。近年注目されているこの概念

をめぐる論文が最後に置かれているのが示唆的である。論者 (Julia Prewitt Brown) は、なぜかその議論で文学テキストが無視されていると述べ、ワイルドのテキストが決定的重要性をもつことをカント、サタジット・レイ、デリダなどを引きながら説いてゆく。編者による序文の一節——本書もまた「ある種のコスモポリタンな精神をもくろむもの」(14)——がこれに呼応している。そこで、各論文の概要のまえにしるされた序文のこの部分にまずふれておきたい。

序文では、ボードレールの「現代生活の画家」の一節が引かれ、そこにでてくる現代における「世界の/市井の芸術家」(artist of the world)のあり方がワイルドに重ねられる。それが示すのは世界への烈しい好奇心、「多様性と他者性の探求であり表現」(3)、フラヌール性である。さらにワイルドの自称「唯美主義者」にこめられた意味が、規範的な文化や習慣、自我のあり方や性愛への異議申し立てと解釈される。ギリシア旅行、アメリカ講演旅行、「コスモポリタン都市」ロンドンとパリでの生活から「国民ではなくて世界市民」(7)としての姿がスケッチされ、作品世界では神話や想像の世界を経めぐり、ジャンルの境界や約束事を知悉しつつ横断し、あらたな経験を創造する者としての姿がしるされる。

私はボードレールのエッセイはこれまで何度も目を通して。「G氏」を「群衆に湯浴みする」アーサー・シモンズに重ねたことはあるものの、ワイルドに見立てることには虚を突かれたと同時に蒙を啓かれた。

以下、私の関心からいくつかの論文を手短に紹介したい。冒頭は James Eli Adams によるワイルドの「遺伝」を論じたもの。アダムズの *Dandies and Desert Saints: Styles of Victorian Masculinity* (1995)、とりわけペイターの男性性の再定義をめぐる議論は私にとっていまだに有益である。本論文でもに取上げられる作品は『ドリアン・グレイの肖像』と「芸術家としての批評家」。アダムズによれば、ワイルドは、当時の科学的知見である「遺伝」の概念にふたつの面で影響されていた。それは人間の主体性を無効化する一方で、「自由の感覚」に根拠をあたえてくれるものである。上記作品では、「思惟よりも行動」という既成道徳を解体することと、生物学的にも文化的にも個人の経験を前代の経験によって形成されたものと見なすこととしてあらわれる (21)。プラトンの *anamnesis* (非-忘却) の影響も指摘され

る。この流れから、ペイターの『モナ・リザ』をめぐる一節や『プラトンとプラトン哲学』における文化的遺伝にかんする記述が引かれるのも当然であろう。ワイルドの「注目すべき主張」としてアダムズが指摘するのは、「芸術家としての批評家」にある一節、「想像力はただ集中された集団の経験 (race-experience) にすぎない」である。アダムズはこれとワイルドのコスモポリタニズムとが不調和だとして理由を推察しているが、ワイルドの言葉が想像力の限界と自由とを同時に示唆する逆説として思考を刺戟することはたしかである。このあとのワイルドの遺伝観とフロイトの深層心理にかんする多層体モデルとの類似性の指摘 (33) をふくめ、全体として個人主義者ワイルドという見方は揺るがないとしても、遺伝を媒介にしてそれが複雑化し多層化してゆくさまがうかがえる。

ペイターとのつながり而言えば、Megan Becker-Leckrone 論文も注目される。これは、ワイルドのギリシア観、とりわけ「芸術家としての批評家」にみられる「プラトンよりもアリストテレス」に依拠する彼の芸術観を皮切りに、「コスモポリタン批評」のあり方を考察したもの。冒頭で論者は、cosmos と cosmetics の語源的同一性を指摘し「装飾は秩序に匹敵する」と述べたミシェル・セールを引くことで、「反-ミメシスのかつ唯物論的」(91) なワイルド批評を「芸術は化粧」という系譜に置く。これは「ツカミ」として申し分ない。このあとアリストテレス芸術論のおさらいがあり、世紀転換点から近年の批評動向が瞥見されたのち、ペイターとワイルドのコスモポリタニズムの共通性が語られ、最後はマックス・ノルダウの『退化論』における批判が引かれ、ノルダウの「頓珍漢ぶり」が逆にワイルドの芸術理論の「不気味なほど有効な案内人」(101) として機能することが語られる。ペイターとワイルドのコスモポリタニズムは、「芸術家と、生を芸術の精神で扱ってきた人」(ペイター「透明的性格」) がふくまれる「特権的グループの、境界のない同胞関係」を生み出す唯美主義に不可欠なものである (98)。「芸術家としての批評家」でギルバートが『モナ・リザ』の一節を口移しで語るパフォーマンスの説明は熱をおびている。ペイターの言葉は話者ふたりに「不気味なかたちで」伝わるだけでなく、話者どうしがお互いの「変容した印象をお互いに伝えるさいの手段となっている」(105)。論者は、ノルダウなら「隷属的剽窃」と非難する(再)引用をワイルドの創造的行為と

して読み直そうとする(105-6)。とくに刺戟的な箇所である。

もうひとつ私の興味を引く事柄がある。論者は1980年代以後のワイルド研究にみられる傾向を、「気取って不真面目な唯美主義者」に代わり「深刻な思想家、哲学者」ワイルドに焦点を当てたことと総括し、前者を一掃することを極端な方向と述べている(この動きの先導者が先述したコスモポリタニズム論の著者ジュリア・ブラウン)。興味ぶかいのは、日本の大正末から昭和初期にかけてのペイター研究で、「深遠な哲学者」ペイターを「軽薄な快樂主義者」ワイルドから切り離そうとする論者がいたことを想起したからである(代表例は土居光知『文学序説』、1922年)。ふたりの「師弟」関係は——実人生のというよりテキスト上のそれは、いままなお考察を誘う問題と言ってよい。

ワイルドのカトリシズムを、マリア信仰や聖餐、教皇崇拝の角度からさまざまなテキストを引きながら語る Claire Masurel-Murray 論文もまた、不勉強な私にはありがたい。そこにはプロテスタント側によるカトリック批判をワイルドが十分に意識していたことがうかがえるので、彼のカトリシズムはきわめてプロテスタント的であるとされる。たとえば『獄中記』の一節で、ミサにおける「対話、衣装、ジェスチャー」が強調される時、それはまさにプロテスタントの非難する芝居があった特徴そのものである(212)。もっとも、ミサをギリシア悲劇にたとえたり、「不可知論者のための教団を設立したい」と述べたりすることは、「世俗のカトリシズム」の域を超えているように思える(211-2)。またワイルドにとってカトリックの魅力は信仰体系ではなく「感情的で美的な」要素にあるとされる(217)。たしかにそうだろうが、ただそれはペイターの方が先駆のはず。しかし、なぜか彼への言及がまったくない——訝しみながらインターネットを検索すると、論者は別の論文の冒頭で、カトリックに改宗した世紀末詩人たちの影響源としてペイターを取上げていた(“Conversions to Catholicism among Fin de Siècle Writers: A Spiritual and Literary Genealogy,” *Cahiers victoriens et édouardiens*, Automne 2012, pp. 105-25)。

日本における『サロメ』上演史百年(1909-2009)を演劇運動と女優/女性のあり方に関連させながら紹介した Hidaka Maho 論文は見のがせない。明治以後の演劇改革、ノラ以上にサロメで表現された松井須磨子の「新しい

女」、女形を模倣して演じた川上貞奴の困難、近年の「新」女形、篠井英介演じるサロメ（鈴木勝秀演出）に具現化された「究極的な人工美」（260）のありようなどが、演劇人や芸術家の書き物、演者自身の発言などによって鮮やかに語られていく（論者による英訳がある）。日本では、ワイルドの風習喜劇ではなく『サロメ』が人気を博してきた理由の歴史的言語文化的考察には納得させられる（255-6）。篠井の演技の「仕組みれたセクシュアリティ」が主人公の性的曖昧さや原作のもつさまざまな境界性を拡張するといった指摘を読むと、すぐにでも舞台を見たくなるのだが、あいにく映像化はされていないようだ。その点だけは隔靴搔痒だが、これは、歴史的視野の大きさと要所での的確な説明とが見事なバランスを取り、多くの情報がうまく塩梅された、美的ともいふべき論文である。

総じて本書は、ワイルドが雑多な関心を持ち、また読者の多様な好奇心を刺戟してくれる作家であることを示している。読者は各々の関心に応じて——多少の消化不良を覚悟のうえで——ページを繰れば、読み応えのある論考にふれることができる。